三 江 五 湖 と 其 人 文 景 観

藤 田 元 春

第 三 高 等 學 校

〔挿圖 1〕

San-Chiang and Wu-Hu with References to
their Cultural Landscape

By Motoharu FUJITA

1. 禹 貢

支那最古の地理書禹貢をみる、曰く「淮海は惟れ揚州、蠡（彭蠡）既に猪す、陽鳥の居る所。三江既に入り震澤（五湖）底定」と、この文字は淮水から南、海に至る間の揚州といつた其地域の大勢論である。所謂揚州とは北は淮水、西は大別山脈であるから今の江蘇の南半、安徽、浙江を主體として福建廣東に及ぶのであるが、嶺南の閩越是當時殆ど化外であるから、この場合の揚州は主として揚子江下流、三江五湖の水郷を包むだ地であつた。禹貢によればこの地方は篠簜繁茂、齒革、羽毛、梗梓の類の産地であつた。さうしてこの地域で三江の水利が完成し、彭蠡即ち鄱陽と震澤即ち五湖地方の湖水が底定するに至つて、はじめて民人の生活が容易になつたといふのである。果して大禹時代にこの揚子江下流地方が漢民族の文化の影響をうけたか否やは明ではないが、古傳說によると呉は周の大伯の後であるといふことになつてゐる。しかし事實は百越南蠻の族で、黄河の文化とはちがつた特殊の民族の故郷であつた。故に史記にも夷蠻の呉は壽夢に至つて王となると記してゐる位であるが、春秋以後になつて北方の用兵乗車の術を習ひ、従前からこの水郷に發達した舟楫の利器を用ひ、呉王闔閭先づ楚を江上の郢（湖北の江陵）に破り其子夫差は中國に覇を唱へ諸侯を黃池（陳留）に會し、越王勾踐ついで呉を亡ぼして北上、同じく水軍を以て諸侯に覇となつた。即ち五霸のうち二人までも、この方面に出たことは、實に揚州に於ける三江五湖の沃地の經濟地理學的必然性の結果であつたのである。故に司馬遷は二千年以前に親しく姑蘇（呉の國都、蘇州）に

上つて五湖を望み、其地勢を目睹して三江五湖の利が其の基礎であることとを導破したのであるが、この形勢は漢、唐、宋を通じて少しも變らず、現に上海に發達した浙江財閥の如き新しい支那の經濟的核心であるのも全くこの地域の地理的結果であるとしなくてはならない。蓋し元、明、清三代はその都を北京に奠めたけれども、いづれもその發祥の本國に近いから、もしくは明の太宗の如く、はじめ燕王であつた因縁で北京に住んだに止まり、常に江蘇浙江の糧食を大運河ではこばなくては北京の都の維持ができなかつたものである。だから漕運といふことは元、明、清三代の最重要な經濟的行政であつた。果して然らば支那政府財政の米櫃ともみるべき江浙の地、即ち三江五湖の利とは何ぞやといふことを明にすることは一面支那經濟地理學上の重要な部門の解答となるのである。乃ち本論まづ三江についての解釋からはじめやうと思ふ。

2. 三 江

三江について、まづ禹貢をみる。曰く

岷冢導漾。東流爲漢 又東爲滄浪之水、過三澨至干大別、南入干江。

(第一段)

東匯澤、爲彭蠡。東爲北江入干海。(第二段)

この文は實に漾水即ち漢江の水源である岷冢(陝西、沔縣西四十里)から流れる漾水は、やがて漢水といひ、滄浪水となり、大別山下に至つて江に入るといふことで現に漢口で大江に合してゐるのを記して誤つてゐない。さうしてこの漢江は漢口までの名であり、揚子江の一支流として取扱はれるべきであるのに、さらにこの禹貢の地理家は、江に入つたのち漢水は東の方、澤即ち低濕の地(白水湖、武湖、張渡湖、梁子湖、保安湖、煖水湖、漳源湖、望天湖、策湖、海口湖、網湖、茅荻湖、朱湖、赤湖、城門湖等現に湖水の連續があるので九江といふ名さへ出來てゐる)即ち九江の方へ迂回し、彭蠡即ち鄱陽湖となり、それからさきは北江となつて海に入る(第二段)との文を記してゐる。故に禹貢よれば、漢江の下流は北江であるといふのであるが、事實上記の九江以下は大江の水路である。然るに禹貢は一方大江について記して曰く

岷山導江、東別爲沱、又東至干澨。過九江、至干東陵。東迤北會干滙、東爲中江入干海。

でこの文によれば揚子江源は岷山（甘肅，四川の境）に出るとする。則ち今日の金沙江は不明の時代であつた。そこで江は東して成都の北で分れて沱江となる。地圖を見ると明なやうに岷江と沱江は瀘縣で合し東三峽の險をすぎ宜昌に下り澧に至る。澧は今湖南省北部の平野にある縣で、澧水東流、江水と共に洞庭湖に合する。洞庭からさきは前記した九江の水郷古への雲夢の大澤であであるが、東陵即岳陽に至つて湖水に合し、東なゝめに北し匯即ち彭蠡に會してから、東して中江となりつゝ海に入るといふのである。故に漢江は彭蠡から東して北江となり、揚子江は匯に會してから東、中江となると記した點から見ると名は北江であり中江であつて實は同じ揚子江のことであるけれども、もしこの文に従ふならば鄱陽から一水東して中江となり、一水は東して北江となるといふことと見なくてはならぬ。つまり江は二つとなるにも不拘之を三江といふのはどうであるか、そこでも一度禹貢以後の地理書を検討してみる。それは有名な「水經」である。後魏の酈道元の註がある。それをみると、江水に關しては禹貢の記事とあまり變つてゐない。即ち江は岷山を以て水源とし、成都盆地をすぎ、三峽を越えて東流、洞庭に潏匯し澧水、沱水、資水、湘水等を合して東流、沙美縣（武昌の西）で沔水（即ち漢水）を合せ東して蕪水（漢口の東、黃石港に近い）を入れ、又東して下雒縣（湖北陽春縣）北をすぎ西南から來る利水を合すといふ所までしか記されてゐない。さうして下雒からさき彭蠡をすぎて東海に入る部分は残念ながら書いてない。しかも別に漢江、即ち沔水の條下にはそれが武都沮縣から出て漢江となり南して江夏沙美縣（今漢江の西）で江に入ると記し、さて沔水は江と合流して後、東彭蠡をすぎ又東して石城（今貴池）に至つて大江が分流するとのべてゐる。今その文を記してみる。

江水東至石城縣分爲二，其一東北流，其一又過毗陵縣北（常州，武進）爲北江又東至會稽餘姚縣東入于海。

とかやうにしてあるが、この文は讀みが下らないので、四部叢刊本宋版水經註によると、分爲二其一東北流又過毗陵縣北爲北江、其一又東至會稽餘姚縣，東入于海。といふ風に置換なくてはならぬ。即ち北流の下の一といふ語が北江の下に入るべきだとのべてある。つまりその意味は經文に従つて其一東北流其一と讀んでは後がつかないので意味をなさないのである。そこでこの經文をかやうに置きかへると大江は鄱陽湖から東北に流

れて江蘇常州の北に流れる北江（今の揚子江本流）と、も一つ別に鄱陽湖から東流して會稽餘姚即ち浙江餘姚縣で錢塘江へ入る水となるといふことになる。即ち禹貢には北江と中江とがあつて、中江は滙して東流する、北江も滙して東流するとあるけれども、水經では一は東北に流れて北江、一は東流して會稽餘姚に達するといふのだから、この一方は、實は禹貢の中江の事を記したのかもしれない。さうしてこの東流の中江は石城縣から發するものとして、その下が果して、東にある天目山脈（千五百米以上）を突破し、錢塘に下りうるや否やは疑問であるとしても、昔時この邊から揚子江の一派が東流したと考へる人があつたのであらう。故に中國地理新誌には長江の故道といふ節を設け、今の江は南京より鎮江を過ぐるの一道に由り海に注ぐと雖ども、古代にあつては末だ必しも然らず、大抵分れて三支となる。其北支は現在の揚子江であり、中支は蕪湖より東流し太湖に達す。其南支は則ち貴池縣より東方浙江省城附近に達す。禹貢の所謂三江此れ也と堂々と明記して、この水經の石城縣より、東して會稽餘姚より海に入るといふ傳説を確定したものゝ如くに記すといふ始末にさへなつてゐる。

が果してさうして水經の所謂餘姚入海の江が石城から出て、高い千目山脈を越え得たであらうかといふに、勿論地理學的に見てこれは信じられないことである。而して禹貢では北と中と二江しかない。又水經にも其一東北流、其一東流で二江しかない。それを無理に三江だとするために、わざと今の錢塘江を以て江の下流だとするのはあまりに地理を無視したことになるのである。

そこでこの誤を正すために參考すべきものとしては漢書地理志しかない。支那の地理書では漢書が最も正確であつて、班固の功績は不朽である。蓋し漢書は班固の作であるが、水經は恐らく班固の見た所であつたとも見え、地理志には水經の文がそのままのつてゐる。それは地理志の

丹陽郡石城（今貴池）分江水，首受江。東至餘姚入海。過郡二。

行千二百里。

といふ一文である。この文とさきに記した江水東至石城縣分爲二、其一東至會稽餘姚縣東入干海といふ文句とは全く同じ文である。故に筆者はこれは班固の時、上記の水經と同様の記録があつたのでこの石城縣の記事をなしたのだと考へると同時に、傳説として、この石城から東流する水は會稽餘姚に至ると考へられたのであるが、それは確實でなかつたから、これを

禹貢の揚州の川とは記さなかつたのである。しかし禹貢にある三江といふ水路は之を認めたので、彼は明確に揚州川三つを別に記してゐる。曰く

會稽郡毗陵（今常州，武進）季札所居，江在北東入海。揚州川。

同郡吳（今蘇州）故國，周太伯所邑 具區澤（太湖）在西，揚州簑（簑とは草原の澤地）古文以爲震澤。南江在南東入海。揚州川。

丹陽郡蕪湖（今蕪湖）中江出西南，東至陽美（今宜興）入海。揚州川。

と即ち北江，南江，中江の三つが揚州川であるといふことは，これが實に三江であるといふ班固の考定であつて，石城の方は認めてゐないのである。そこでこの文によると今の南京，鎮江の北を通る大江は北江であり，太湖から南東に流れて錢塘江に入るのが，南江である。別に蕪湖の西南から東流する中江がある。そこで石城から東に分れたといふのは實は石城で江は二つとなつて蕪湖に下るが，蕪湖までくると，今日でもそこから平坦な水郷五湖の分布する低地となるので，こゝに東して陽美に至り太湖に入る中江，

又は美水があつたとした。これは實に江の分流で南して南江となり錢塘江に入り餘姚の北で海に入るのである。だから、石城で分水餘姚に入るとしるしたが、實はそれは蕪湖に至つて東流する中江のことであつたらしい。さうして班固は、この中江が即ち禹貢や水經の分流の江其一にあたると認めたのである。かくて禹貢の三江とは、一は北江、一は美水即中江、一は即ち吳都から東南流して錢塘江に入る南江であるときまつた。しかし現在チョコレート色の汪洋たる大江は主としてこの北江を流れ、蕪湖と太湖との間の中江は水も澄みきつてゐて江水をうけるとしてもその量は多くない。つまりクリークたるの程度であるから、これをしも江と名づけるのは當らない。そこで三江といふのはさうした蕪湖や石城からの分流でなく、現に蘇州から東海に入る所の揚子江のデルタの中の川のことだとのべる學者もある。王先謙の漢書補註をみると

松江自湖東北流逕七十里，江水岐分謂之三江口。吳越春秋稱，范蠡去越乘舟出三江之口入五湖之中者也。此亦別爲三江五湖雖名稱相亂不與職方同。

庾仲初揚都賦注曰。今太湖東注爲松江下七十里有水口分流東北入海爲婁江。東南入海爲東江。與松江而三。非禹貢之三江也。

といふ記事がある。即ち三江とは太湖から出る水が松江（今吳江）となり東北七十里を下つて三分する。一つは東北婁江（劉家江）となり、一つは東流して吳淞江となり、一つは東南流して東江となる。そこで蘇州の東方に三江があるといふ庾仲初の意見である。これは吳越春秋の三江口であつてそこから范蠡は五湖の方へ行つたといふのであるが、かうした三江は實は吳の地の三江で職方や禹貢の三江ではないのだといふ説である。蓋し太湖江東の水系は實に無數の大小のクリークであつて、現に各クリークを灌漑に供し、水田耕作をやつてゐる實狀から、その無數のクリークのうちに婁江とか吳淞江とか東江といふのを拾つて三江と名づけたに止まる。決して禹貢の三江ではない。漢書地理志を讀み、現在の地圖を見るならば、三江はかうした小規模のクリークではなく蕪湖（或は石城から蕪湖に至る）から東流した美水即ち中江と、現在の大江即ち常州の北を東流する大揚子江と、さうして別に吳から東南に流るゝ南江があつて、それが錢塘江に入るものであるとしなくてはならない。

3. 五 湖

然らば五湖とは何であるか。漢書に従へば蕪湖から水が分流して東する處の中江の通りうる現在の地形圖（附圖）をみると明なやうに、こゝには丹陽、固城、三塔、長蕩、滬湖の五つの湖水があつて水を通じ、宣興即陽美に至つて太湖に入つてゐる。だからこの五つの湖水即ち五湖ではないか。王先謙は五湖とは長蕩、太湖、射湖、貴湖、滬湖の五つであるとのべてゐるが、射と貴とはこのうちの何れであるか不明である。郭景純の江賦註には

五湖以漫漭言。江水經緯五湖，而苞注太湖，五湖即太湖之兼攝通稱。とある。即ち五湖は江水が縦横に連ねてゐる水で、それはやがて太湖に苞注するから、太湖即ち五湖であると言である。つまり五湖とは太湖地方の總稱であるといふのだ。しかし漢書地理志の述ぶる通り中江即ち蕪湖に出た羨水は宣興即ち陽美に至つて海に入るとあつて、太湖に入ると記してない。當時中江の入水する太湖は海と考へられたのであるから、太湖を五湖にいれるわけにはゆかない。勿論太湖は五湖の苞注する所ではあるが、五湖はその上流でなくてはならぬ。そこで漢書の記事に従へば五湖は實に中江の通る滬湖、長蕩、三塔、石臼（丹陽）及び固城湖等の無數の沼澤を數へた語であつたであらう。さうして五湖といふのは實に中江の河跡湖ともみるべきである。そこでこれらの湖水が苞注する太湖から、更に東すれば崑城、陽城、澄湖、澱山、笠湖等の多數の湖がある。蓋し大江は彭蠡から東してまづ石城で二流となり一は今の江となり一は蕪湖までのび東して太湖に出る。然る後太湖から出た水は無數の濕地を縦横に流れるが、その中で南江といふのが南東に出た。それは今日では蘇州から杭州への運河本流となるのであるが、この水が海鹽縣即ち餘姚の對岸で海に入つたとすると（附圖参照）、揚子江の下流は實に三江五湖の水郷を形成したのである。所謂大江の三角地デルタである、暖帶であつて水運の利がある。篠蕩をはじめ稻禾大に繁茂して揚州の藪となる。自から水田の利を生じたので、三江五湖の利といふ語が如實に理解されると思ふ。

由來揚子江の沿岸は陷沒湖や河跡湖が多い。地圖を案ずれば、その水源の金沙江は昔は南流してメーコンの一支流であつたのが、雲南の石鼓で急に東北に轉じ截頭河の好例をしめす。そこで舊い河跡に劍湖と洱海等が南

北に並んでゐる。ついで四川の鴉礮江を見ると、これも地質時代に南流して或は紅河上流白岩江となつてゐたのが、截頭されたので、舊鴉礮の河跡に多くの小湖が排列してゐるらしく見える。やがて四川省を辭して海拔九十米の宜昌に下つてから所謂四曲をなす。第一曲は岳陽で洞庭に合し、第二は漢口（古沙羨縣）で漢水を合す。この附近九江の名がある程に陥没湖又は河跡湖の連続であつて、江水互に之に通じて經緯をなし、第三は今の湖口に至つて鄱陽の陥没湖の水をうける。それから東北に流れ蕪湖に達すると潮汐を感ずる上流の極限となる。そこで蕪湖の西南から中江を分岐した。やがて第四の曲は南京鎮江の間に生じ、そこから東南に流れて海に入るのである。さうした次第で江の通ずる周圍で第一には洞庭附近の沼澤地と第二は蕪湖以東の三江五湖の水郷が發達したのである。揚子江はかくて上流四川の成都盆地に於て古代工藝發達の境をひらき、下流は三江五湖、即ち吳（蘇州）都を中心としての吳越の文化地域を形成したのである。司馬遷はかうした地理をみて成都盆地に丹、砂、石、銅、鐵、竹木の器の産することを記すと共に、三江五湖即ち吳越の地については、地廣く人稀に稻を飯し魚を羹とし或は火耕水耨、果隋贏蛤、賈を待たずして足る。地勢饒食、饑饉の患なしと斷じて其自然が稻を作る水田の郷であることをつけ、吳はかうした水田の農地の中心に位し、東に海鹽の饒あり、三江五湖の利あるが故に江東の一都會となつたと斷言したのであつた。蓋し江南の景觀は今日に至つても、その自然の水利に發展した水田の國であり、稻を飯する民族の村だといふ語につきるのである。

4. 水田と村落景觀

周代農耕の文化として井田之法といふものを誇るのは經學者の常である。それは方一里（三百步）の地を井字に區別し、百步平方のものを九つこしらへ、その中を公田とし、周圍を八夫に分ちて耕さしめる。別に中田に二十歩を割いて民屋の敷地となし、残り八十歩が公田、これを八家共に耕して租とする。さうして百歩の田を以て八家各その生活を營む。故に井田は九夫の面積といふ。かうした制度はただ一つの井田ではない。廣い三江五湖の平原にすべて同様な地割が出来ると田と田の間には東西南北に通ずる溝洫、徑徐といふ多數の溝や道路が出来て全體で數百里の地が、すべて整然たる井字區劃に統制されるといふのである。さうしてこの立法は

周文王に始まるといふのであるから、洛邑を中心としての黄河の平原にも、この井字區劃が行はれたであらうことは、恰も我國近畿平野の條里制の如くであつたであらうかといふ。然るに黄河平原は度々水旱の災をうける沙地である。亦文王以後數千年の歴史が経過したので、さうした井田の區劃は今日の北支那では何處にもない。しかるに江南に行き上海から蘇州や杭州へ汽車の旅でもしてみると、今も嚴然として正しい溝洫徑徐が一定の距離と水田とを隔てて存在するのを發見する。そこで古い井田の法は、江南の水郷に残存してゐても、北支那には存在しないといふことから、北支那は最初井田之法を定めてみたが、自然の洪水で實行が出来ないで、江南は水田の國であるから後世にそれが残つた？といふ考が生ずる。即ち古い田制はもとは北のものであるけれども、自然の勢で北に亡はれて南に残つたとする人もあるが、この場合それは正しい意見であるかどうか。

歴史の教ふる所では、井田の法は或は周の文王の政治であつたかもしれない。けれども井田を實行するにやすく、且その規模を永續するには水田の地域であつて洪水などに煩はされない地に限られる。假令ば丹波南桑の條里でも、保津川に近い水浸の村にはそれがなくて、一段高い段丘平原の曾我部、葦田野などに残存するが如く、其例甚だ多い。従つて黄河のやうな河岸で稻をつくらない所には、最初から井田の實行は出来なかつたであらうと考へられる。井田は字の示す通り何としても水田地の景觀である。我國でも山間には、さうした形も影もない棚田が多く、少しく開けた平地でないといふ條里は出来てゐないのである。

漢代の百科辭典である淮南子をみると、東方（山東）は麥に宜しく、南方（江南）は稻に宜しく、西方（山西、陝西）は黍に宜しく北方（長城以北）は菽（大豆）に宜しく、中央（黄河平原）は禾即ち黄粱に富むとある。この文句は今日に至つても全く變化のない農作物の分布を語るもので、周代に於ても稻は江南のものであり、即ち水田は江南であり、中央は禾即ち黄粱、西方は黍を産したのである。ことに周は陝西、畜牧の地に發したので稷即ち禾を常食とした蠻族に發祥してゐる。蓋し黍や禾や麥や菽いづれも陸田の産であつて、江南の稻田とは根本的に農業の性質がちがふ。だから今日でも、北支の人民は田をつくつて、足を水につけることを絶対に忌避するので、その農法は根本的にちがふ。たとへ灌漑の要があつても、陸田は畦の間に水を流すだけであつて、稻の田の如く水をたゝへることをし

ない。又その必要もない。自然溝洫徑徐といふ整然たる地割の必要もなく、又さうしたものは出来なかつたであらう。しかし江南は水田の郷であるから、今日に至つても整然たる地割がある。新しい崇明島などを開墾するに當つても、やはり一定の距離をへだてて溝洫（クリーク）や道路即ち徑徐をつくり、一戸一戸の持ち分を正しく配當してゐるのである。つまり今も猶井田の法が生きてゐるのである。よつて思ふにこの井田なるものは實は周制ではない。周以前の殷代もしくは夷蠻であつた吳の過去に於て既に水田が出来てゐて自から溝洫があつた。そこで周人が天下を支配して、この江南の地割をみて、その土地利用の法に教へられ、之を井田之法となし、以て天下に行ふべきだと假定したにすぎない。周は何といつても中原からみれば、西戎であり、まづい黍を食ふところの牧畜の民である。どうして立派な井田の法などを考へうるものではなかつた。かの文王が、邑を洛陽に奠めたととき、殷の民を好遇して移住して貰はねば、王城の體裁にならなかつた位である。従つて周の文化は殷の文化を繼承したにすぎない。思ふに井田の如き、恐らく殷制であつて夙に江南に存在した自然の水田から出来たものだと考へるべきであらう。

世人は北支に城廓の都邑があり村落には磚壁や土城をめぐらした集團生活のあるのを見るが、江南にゆくと全く散村となる。何故に揚子江を越えると散村になるのか、日本に於ても城廓の村はなく、村落といへば集村にしても散村にしても、ただ自然のままに水田の中に散在するやうになつてゐるので、之を不思議がる人がないではない。しかしこれこそ實に江南の三江五湖の地域に於ける稻作水田の村落景觀と同じ理由から發生したことを知らねばならない。而してかゝる北支と江南との景觀の差については、淮南王安の謀臣嚴助（漢書列傳）の云つた語がある、この人は實に吳の會稽の人である。曰く

臣聞く越は城廓邑里有に非ず、谿谷の間篁竹の中に居る

とかういふ風に南方の特色を二千年以前に導破してゐる。その意味は、北支には城廓邑里といつて、邑即ち王城の都會でも里、即ち村落でも、いづれも城廓がある。小さい里でも土城又は磚城をめぐらし、閭門や望樓を設け、夜分は村の門を閉じて、出入を誰何するといふことが管子にも記されてゐる。即ち北支ではいつ何時北方の胡族や匪賊が襲撃するかもしれないし、或は數々水旱の災がある。村民は一致團結して、この天然と自然の害

敵と戦はねばならない。自から集村となり、その村里にも城廓が出来た。現に山東省の西の方濟寧附近にゆくと一つの村があれば、必ず城壁があるのみではなく、その村の後背の山腹には、村と全く同じだけの城壁作の逃避地がある。即ち一つの村が、二つの城廓をもつ。洛陽の南の方の望城崗といふ小村の如き誠に嚴乎たる城壁があり、城内四間幅の道があつて、閤門は南北二つもあつたて堂々たる煉瓦作りである。その隣の二郎廟といふ村もやはり土城の集村であつた。筆者は親しくこれを訪ねて、北支の村落の城廓に驚嘆したのであるが、しかしそれは自分等がさうしたものを持たないから一寸驚いたのである。しかるに江南にゆくと、散村が水田の間にあつて、クリークのかなた一叢の篠や木のかげに、無防備の村落が點在する、非常に我等に親しみやすい景觀にかはる。そこで嚴助は、江南には邑里に城廓有に非ず、谿谷の間、篁竹の中に居るとのべた。こゝで谿谷といふのは、日本語の谷ではない。江南の谿谷は、即ちクリークである。勿論江南でも、蘇州 杭州、松江、嘉興などの縣城には、城廓がある。しかし村落といへば決して城壁はなく、すべてが水田の中の、篁竹の中に包まれて、數戸の散村になつてゐる。

この事は井田の法に中田廬ありといふ形で、水田を周圍にして中央の八家がその中央の二十歩に住むといふ形から出来たもので、實は最初から水田を作る場合には、溝洫のために自から城壁もなく樹木を周邊に栽えた簡單な散村になるものである。

かうした江南の民屋が、我國の水田地の民屋と共通した間取りや、屋根をもつことについては、拙著日本民家史増補版の中にのべてあるから、ここにこれを略するが、どこまでも江南は水田本位の村落であるだけに、嚴助の指摘したやうな江南の村落景觀は我國の同様な村落にも共通するもの面白い類似であると信ずる。従つて井田の法といふ周制の原型は、實は周以前この三江五湖の自然から出来たもので、周人は陝西の黍稷の民であるから、初から全然知らなかつた文化である。それを後に學んで井田の法をつくつたけれども、もともとその土着の制でないから、北支那には今日全くその片鱗も見得られないが、しかし江南には今も昔のまゝに、稻食をする、水田を耕やす、さうしてその村落は、城廓のない散村といふ景觀を有するのである。

曩に二千年以前嚴助がこれを指摘した時代に於て、北支から歐洲へかけ

ての古大陸では、住民は主として牧畜(牛、羊、馬、豚)の飼育にあたり、酪をのみ麥や黍を食するのであつたから、自から車馬を以て戦ふといふ習慣となつた。さうして一旦氣候が乾燥して牧畜の草が枯れると村を擧つて、良地に移動するといふ生活方式をたてた。自から村落はいつ侵入されるかしたるものではない。故に村に城廓をつくり、邑に堅城塹濠をめぐらし、國に萬里の長城を築くやうにさへなつた。これ實に乾田畜牧の國の景觀である。

しかし江南では地遠くして胡馬は來ない。何となれば南船北馬の語の示すごとく、江南は舟楫の國であつて、兵馬に利がない。村でもクリークが自然の防壁であることは、今回の上海戦争でも明になつた。従つて古來三江五湖は實に兵馬を用ふるの地ではなく軍船を便とする地域であつた。自然水戦はあつても、陸戦の慘害は少い。自から過去に既に城廓は不用であつた。故に曰く、越は城廓邑里有るに非ずである。さうしてこの嚴助の語は決して卑下したのではない。一語にして南北の景觀を導破したのみである。故に曰く民は谿谷篁竹の中に居ると同じく淮南子の齊俗訓にもこの景觀について

胡人馬に便に。越人舟に便。形を異にし類を殊にす
とあるが、この文句はかの有名な南船北馬といふ語のよつて來る文字である。我等は三江五湖の水利をみて、この楊子江の下流にかうした散村、水田、舟運といふ文化景の發達しなくてはならなかつた理由を發見し得たと信ずる。

5. 吳越の經濟理論

従つて支那の文化は一概に黄河の文化だとはいへぬ。むしろ殷代既に發展した吳越の水田と稻食の豐沃な自然の惠澤から發展した著しい農耕文化の偉大さに心をひかれねばならない。

それは史記貨殖傳にもある通り、江南では稻の豐凶といふことが人民の安否にかゝるので、自然年々の雨量の多少に注意をむけざるを得なかつた。そこで太陽の黒點の周期に一致して(それは支那の學者の知つた事ではないが、經驗上)約十二年ごとに雨量の増減があることを知り、これに伴つて米の豐凶が順環する。故に米價の安いときに買つて、高い時に賣るのは致富の要訣であるといふ景氣論の神髓にまで到達した。

この事は呉の都に住んでゐた計然といふ人の理論であつて、范蠡に策を授けて曰く、鬪を知ればまづ修備し、時に用ふれば則ち物を知る、二者形るれば則ち萬貨の情得て觀るべしとのべて、戦争の準備はまづしなくてはならぬ、そのために時に用ふる所の物をしらねばならぬ。よく自然の狀をみると六年毎に豐年と凶年がくるから、その準備をして豐年に積聚しなくてはならぬといふ理をのべて曰く、

六歲穰，六歲旱，十二歲一大饑，夫糶二十病農九十病末，上不過八十

下不減三十則農末共利（註末とは商人のこと）

とのべた。これは十二年の間に穰することゝ旱とが交代するから、其準備をせよ。さうして米價二十ともなれば農民がこまる。九十以上になれば商人やサラリーマンがこまる。米價は八十から三十まで、即ち最高最低の價格をこの中間に定めるのがよいといふ意見である。これは實に驚くべき商業の極意で現に我國の米價統制の行ふ所であるが、かうした理論は實にこの三江五湖の如き農業、ことに水田地に於てはじめて發見されう所の經濟學說であつた。果然計然がこれをのべ、范蠡はこれを實行し、越王勾踐は之によつて天下に覇業を立つるに至つたといふのである。かくてどこまでも江南は水田の郷であつたから、自然かうした考が發生したと見ると江蘇浙江の富は吳越即ち三千年の過去に於て既に全支那を動かしたのである。爾來今日に至るまで、この地域の經濟力は依然として天下に冠絶してゐるのである。これをしも三江五湖の利といはずして何ぞやとでも云ひたい。

かやうにして我等は司馬遷の歷史觀もしくは人文地理學に教へられる處の多いことを感じ、湖沼水澤の文化といふことも亦湖沼學者の研究すべき一部門ではなからうかと考へ田中子爵古稀の祝賀に際し敢てこの一文を捧げる。